

はじめに 琴ことと琴きん

古来、音楽は神のためにあつたといわれる。非日常の響き・リズム・振動が、洋の東西を問わず神を招き下ろすまつりの時空において奏されたことは、世界各地に遺された壁画や彫刻画レリーフからもうかがわれるところだ。日本においてもそれは変わらない。古くは縄文時代の地層から石笛や土鈴などが出土しており、笛・太鼓・絃楽器などの楽器を伴いつつ歌をうたい舞を舞つて、神を祀つたと思われる。

わが国において特徴的なのは、そうした考古学的な出土楽器の中でも、絃楽器の出土例が抜きん出て多いことだ。古墳時代以前の絃楽器は形状・絃数などが一定せず固定した形を持っていないが、日本固有の絃楽器として一括して扱われ、「コト(琴)」と総称される。こうしたコトの多くは弥生時代から古墳時代にかけての祭祀遺構、とくに水辺におけるまつりの跡より発見され、古墳時代になると、コトの遺物そのものだけでなく、まつりの場でコトを弾く人物の埴輪はにわ(彈琴埴輪だんきんはにわ)もみられるようになる。これらの出土品からうかがえるのは、日本では有史以前からずっと、楽器の中でもコトが特別なものとみなされ祭祀に利用されていたらしいということである。それゆえにコトには早くより注目が集まり、考古学的な研究が重ねられて今に至っている。

コトを特別視する傾向は、記紀・風土記などの文献資料の時代になつても変わらない。これらの文献には笛・鼓などの楽器もみられるが、コトはときには神の持ち物として、あるいは天皇による神降ろしの具としてというように、やはり特別な楽器として語られている。とくに、オオナムヂが根堅州国ねかたすくにのササノオのもとから盗み出した天あめの沼琴ぬまごとや、仲哀天皇の演奏により神功皇后の神がかりを招いたコトは、王権とコトとの関わりを強く示すものとして着目さ

れる。

このように記紀・風土記では神々や天皇の楽器だったコトだが、万葉集時代に入るとようやく、個人の愛好品としての側面をみせはじめた。しかしその場合にも演奏者は王族か渡来人に限られているという点で、やはり特異な楽器だった。この頃には楽器の構造も一枚板に六本の絃を張るという形に定まり、これが平安時代の「和琴^{わごん}」の直接の祖形となる。そして平安時代の和琴もやはりまつりとの関わりが深く、神に捧げる神楽で演奏されるかたわら、貴族の遊興にも用いられた。

以上のように、日本でははるか昔から、コトという在来の絃楽器が特別に重んじられてきた。しかし平安時代に入ると、新たにもう一つの絃楽器が尊ばれる気運が生じてくる。「琴^{きん}」あるいは「琴の琴^{きんご}」とよばれる、中国よりもたらされた七絃の絃楽器だ。

琴^{きん}は儒教において天意を反映する楽器とされ、徳高き君子が弾くものでもあったため、古代中国では第一の楽器として尊ばれた。日本では平安時代になってから本格的に受容されたが、実際の演奏はごく限られた時代・範囲に限定され、ほどなく途絶してしまふ。そのため現在の日本では、この楽器についてはほとんど知られていない。

わが国においていちちはやく琴^{きん}に着目し研究を重ねてきたのは、古典文学の研究者、とくに源氏物語(十一世紀はじめ成立)の研究者たちである。それというのも、源氏物語においてはこの琴^{きん}が、主人公光源氏の尊貴性や超越性を表徴しているからだ。光源氏は三歳で臣籍に下つて源氏となり、皇位継承権を失つてしまふ。しかし一方で物語では、彼には帝王となるべき相があるともされている。源氏物語はこうした相反する現実と予言の狭間に光源氏を立たせ、臣下となつた彼に潜在する王者としての資質を、琴^{きん}という楽器に象徴させているのだ。物語中で光源氏は当代随一の琴^{きん}の弾き手であるばかりでなく、独自の奏法すら創出してゐる。また光源氏以外の人物が琴^{きん}を演奏する場合でも奏者は例外なく皇統であり、琴^{きん}は天皇家の王権を表象するものとしても機能しているのである。

現実の貴族社会で琴が弾かれたのは、ほんのわずかな期間にすぎない。源氏物語が書かれた一条朝にはすでに、この楽器を弾く者はほとんどいなくなつたとされる。しかし、わが国最高峰の文学作品と謳われる源氏物語が皇統と光源氏の楽器として位置づけられているがゆえに、わが国では物語文学の世界でのみ、琴は皇族の弾く楽器として長く命脈を保つていった。たとえ琴という楽器が全く姿を消した中世に至つてすら、藤原定家の作とされる松浦宮物語(鎌倉時代初期成立)においては、琴が重要なモチーフとして描かれている。

しかしこういつた、皇統や王権を表象する源氏物語の琴のありようは、実は奇妙なのだ。冒頭に述べたように、遺跡からの出土品や記紀などの文献資料によると、王権を権威づけるまつりの場で用いられているのは、在来絃楽器のコトである。そして平安時代になつても、コトを直接の祖先とする和琴がその役割を受け継ぎ、神事の際に演奏された。日本古来の祭器であるコトの末裔たる和琴があるにもかかわらず、源氏物語はなぜ、琴を光源氏の王権の象徴としたのだろう。

なぜ琴が王権を象徴するのか——実はそれは、源氏物語に向けるべき問いではない。琴についての考究の端緒を切つたのは源氏物語研究だったが、近年では史学分野で、楽器や音楽と王権との関わりについての研究が進んでいる。そしてその成果の一つとして、物語文学で皇統の楽器とされている琴が、実は史実的にも皇統に独占される傾向があつたことが明らかにされた。つまり、琴を皇統の楽器としたのは源氏物語の創作ではなく、皇統による琴の独占という歴史的な状況を反映していたのだ。そしてさらに、天皇家による琴の独占を描いた源氏物語には先蹤があつた。うつほ物語である。

うつほ物語は源氏物語よりやや早い十世紀後半に書かれた、日本で最初の長編物語だ。物語文学とは平安時代に誕生・盛行したかな文字による散文作品をいい、虚構性をもつのを特徴とする。現存最古の物語作品は竹取物語、物語文学の最高峰は源氏物語、最初の長編作品として源氏物語の直接の先輩にあたるのがうつほ物語、ということになる。

そして、うつほ物語は琴をメインモチーフとする作品であり、この作品がすでに、主人公の一族と皇統だけが弾く楽器として琴を描いているのだ。源氏物語の琴は、うつほ物語の琴から多くを継承しているといえるだろう。しかしこのうつほ物語もまた、皇室が独占的に琴を尊んだという実際の状況を踏まえて書かれたものと考えられる。したがって、「なぜ琴が王権を象徴するのか」という疑問はそのまま、歴史的な状況へと投げかえされることになるだろう。「なぜ皇室は琴を尊び独占したのか」と。

古くから王権と関わりをもってきた和琴があるのに、なぜ平安時代には琴が王権と結びつけられたのだろうか。いや実は、その前にまず、古代においてコトが祭祀具とされたことに疑問の目を向けなければならぬ。現代の研究では、コトは神を下ろすための楽器なのだと考えられている。埴輪群像の中に見いだされる弾琴埴輪がまつりの場に置かれていることや、仲哀天皇の弾琴によって神功皇后が神がかりする記紀の記述からそう推察されてきたのだ。しかし世界的視野で見れば、シャーマンの神がかりは多くの場合、打楽器によって行われる。太鼓や銅鑼あるいは鈴など響きの大きい楽器を激しいリズムで打ち続けることによって、シャーマンはトランス状態へと移行していく。笛でトランスする例もあるが、そうした場合には岩窟などの閉じた空間に入って、高周波の音を浴びることによって神を降ろすようだ。

いつぼうコトや琴は、絃楽器の中でもひとときわ音が小さい。とくに古い時代のコトは、構造的に演奏には不適であり、単なる音具として、しかも極めて響きの小さなものとしてしか機能しないことが指摘されている。そうした楽器でトランス状態に入るのは、実際にはむづかしいだろう。弾琴埴輪が置かれているまつりの場も実は神降ろしのまつりではなく、多くの場合、巫女が王に聖水を献上するまつりである。したがって古代のまつりにおける弾琴の役割は神降ろしではなく、たとえば弓による鳴絃と同様の、絃の響きによる破邪や浄めであった可能性が高い。

しかしそうした用途であったとしても、王のまつりにコトが参加させられているのはなぜなのかという疑問は残り